

第3次帯広市食育推進計画策定に向けた意見交換会要旨

日時 平成28年11月29日(火) 13時30分～15時20分

場所 市庁舎10階第5B会議室

参加者 食育推進サポーター 12団体・個人 計13名

策定委員会構成各課 7課 計12名

【内容】

1. 計画に関して事前に聴取した意見について

(1) 第2次計画期間中の主な取組について

意見：地元高校生や市民団体等の地元食材活用のアイデアレシピはどのようなものだったのか。

回答：南商業高校クッキング部や、家庭教育学級、大谷短大の栄養士よりレシピを頂き給食センターでアレンジをして提供した。

地場産食材を活用し、「南商とりさん親子丼」、「ミネストローネ」、「小松菜と揚げ玉のおひたし」、「ビーンズ入りラタトゥイユ」などを提供。

(2) 昨年実施したアンケート調査結果について

意見：朝食の欠食状況について、一般市民（大人）は減少している一方で、児童・生徒について、増加しているのは非常に残念。

理由としてあげられている項目は、「時間がない」「食欲がない」などで、夜の過ごし方に問題があるのではと推察される。

生活リズムなど家庭（親を含め）での意識付けが重要だと思われる。

回答：これまでも朝食をとることの重要性は、学校などで子どもたちに直接教えてきたところであり、保護者に対しても講演会やパンフレットなどを通じて啓発してきた。

また、就寝時間と起床時間は朝食の摂取にも影響していると推察され、規則正しい生活の必要性も啓発している。今後とも継続して、取り組む必要がある。

(3) 食育推進にあたっての数値目標について

意見①：「牛乳・乳製品を週5日以上とる市民の割合」について、小6、中3に対して、給食での摂取が可能なので、目標値は100%（アレルギー児は除く）とはならないか。

回答：小6、中3共に上昇してきているものの、第2次計画期間中に目標を達成する

ことはできなかったことから据え置いたもの。

また、牛乳については、腹痛が起こるため、控えているというアンケートへの回答も見受けられた。

意見②：食育推進サポーターの登録数増加も大切だが、その活動内容（実働）が重要だと思われる。活動した事業の数などは、反映しないのか。

回答： 第3次計画を作成するうえで基本としている国の計画において、「食育の推進に関わるボランティアの数を増やす」という項目があることから、第2次に引き続き、登録数の増加を目標値として設定している。
活動件数については毎年増加してきているため、今後も事業の周知に努め、より多くの方に活用されるよう取り組む。

意見③：農業体験の流れで、四季を通じて体験活動があればよいと思う。

回答： 農業を基幹産業とする帯広市においては、農業体験の実施に関しては、他の地域より比較的恵まれた環境にある。その他の活動についても、関係各所と連携しながら、引き続き、体験の場を提供していきたい。

意見④：中学生においては、体験できることを知らなかった等の意見があるので、援農体験はどうだろうか。人のために役立つ達成感を得ることができるのではないか。

回答： 援農体験等については、農業関係者、学校関係者と協議しながら、今後実施の可能性等について探っていきたい。

意見⑤：教育現場での食育は重要であり、食育指導専門員の役割に期待したいところだが、人数は足りているのか。

回答： 食育指導専門員は2名だが、栄養教諭が帯広市では5名配置されている。
従って、教育委員会作成の「おびひろらしい食育プログラム」に基づき活動する者は計7名いる。

(4) 各課及び関係団体が実施する取組について

意見： 食の環を広げて育む健康な「身体」の施策について、青年・壮年・中年への世代へのアプローチの機会を増やせるとよい。

働く世代なので、企業（職場）を巻き込んだ取組ができるとよい。

回答： アンケート調査の結果から、特に20代～30代については、食の重要性を認識していながらも、実行できていない状況がうかがえるため、若い世代、働く世代への啓発は重要と考える。

また、仕事が忙しく、時間がないため、食がおろそかになるという意見から、職場、企業への取組が必要であると考えます。

2. サポーターの取組紹介も含めた意見交換

- ・先人の知恵や技を教える役割という重要な立場にあり、もっと若い親たちに伝えたい。このような会議では、サポーター全員と交流することができないため、少人数の部会等があればいいと思う。

また、サポーター自身も生産現場に行き、現場を知ることができるような取組も必要であると思う。経験から、更に深みのある食育を実践できるのでは。

- ・食育に関する十分な予算が確保できないことにより、食育の活動が下火になることを危惧している。

様々な方々が食育に携わっているので、役割分担し、きめ細やかな活動ができればよい。そのためには、もっと話し合いの場をもつべき。

- ・料理と運動を組み合わせた企画や、栄養バランスを意識した料理教室の開催をしている。

- ・食育推進計画のアンケート項目の中に、「農業（畑作・酪農）体験をしたことのある市民の割合」とあるが、生涯にわたって一度は体験したことがあるということなのか、今年、一度は体験したということなのかでは、意味合いが異なる。

こども課が実施している保育所入所児童を対象とした、食育の体験とあるが、市内全保育所で実施するのか、1クラスで実施するのかによって意味合いが違う。

計画に具体的に記載されていなくても、頻度や対象について明確な目標があるのか。

また、食育を進める上では、学校などの公的な機関での取組も重要で、子どもたちが農場体験をする際に、バス代の補助をするなど、具体的な計画と施策が必要では。

質問に対する市からの説明

○アンケートにおける農作業体験の頻度について

経験が一度でもあればという聞き方をしている。

市内小学生は、基本的に全員体験している。中学生は体験したことを忘れている可能性がある。問いかけの方法によって、回答に変化があると推察される。今後は、様々な形でより正しい数字に近づけるように工夫していきたい。

○保育所における農作業調理体験の頻度、範囲について

基本的に全ての公立保育所が実施しているが、幼稚園や、民間の保育所については、正確な情報は不明。

○子どもたちの体験学習に伴うバス等の活用について

市では、小学4年生及び中学2年生の学習でバスを使った見学や体験をするための予算付けをしている。

- ・調理師の各部会で、小学校や保育所で記念事業としての食育事業の実施や、施設などでの料理の提供、料理教室で講師を担当するなどの活動をしている。
このような意見交換会の機会に、教育関係などの団体から、声をかけていただければ、お手伝いしたい。
- ・長く、栄養学や食品化学などを教えていた。食と栄養は非常に関係性の深いもので、栄養について知識がなければ、食についてもなかなか理解しにくい。メディアで体に良いものとされた途端に、それだけを摂ってしまいがち。健康に対する知識が希薄なために、情報に流されてしまうことがあるように思う。
また、計画中、「豊かな心を育む」とあるが、心は健康を保つうえでは大切。バランスのとれた食事をしていても、心が晴れていなければ、体に栄養が行き渡らない。希望を持って楽しく生きようとするのが、老若男女に必要なこと。
- ・歯の健康と食生活は関係があり、歯の治療だけでなく、食べることも含め、健康全体を支援していくため、介護施設、医療機関でネットワークを組んでいる。
食育基本法が施行される前の時代を生き、食生活を教育として学んでいない。今の子どもが親になった時は、多少の知識があると思うが、その狭間にいる今の親世代をどうするか課題。
また、高校生に食生活を学んでもらうことで、独り立ちした時の食生活の乱れを予防できるのでは。学ばなければ、バランスの悪い食事、無理なダイエットとなり、家庭を持

った場合は、その次の世代にまで悪影響がでてしまう。

今の親世代が食生活について学ばなければ子どもに正しい情報が伝わらず、また、自分自身が高齢になった際に低栄養に陥る恐れがある。

- ・「心身ともに健康な人、まちづくり」を掲げ、活動している。

数年前まで親子料理教室を実施。地場産の安心安全な食材を使用し、親子で料理するもの。忙しく、普段子どもと料理をする機会がない親御さんに子どもと接してほしいという願いもあり、実施していた。

また、市民に、健康で長生きして欲しいという願いから、食事・運動・休養の3つの項目に分かれたチェックシートを作成し、自身の生活習慣を見直す機会を提供している。また、食に関する美育については、テーブルに一輪花を飾る、きれいな器を使う、作ってくれた方に感謝することなどを実践している。

- ・アンケート結果から、教育現場に求められていることが多いと感じた。

摂取が望ましいとされる野菜の量についてや、牛乳が飲めないのであれば乳製品でも良い等についての説明は子どもたちに届いているのか。

子どもたちへの食育として料理教室をすることが良いことなのか。食育＝料理教室とは必ずしもならないのでは。例えば家庭で、食材の買物をさせたり、食卓の後片づけを任せることで少しずつ子どもたちも変わるのではないか。

- ・食育フェスティバルや健康まつりなどのイベントへ参加している。

イベントでは試食を提供し、身体への効果について解説をするが、十分な時間を割けないため、伝えたいことが伝えきれしていない。

ある施設では、利用者に「食」について話をするが、提供されるものを食べるだけでは食の重要性について、なかなか理解してもらえなかった。

しかし、施設で畑を作ったり、近隣の農家さんに仕事に行き、野菜を持ち帰ると、この野菜を使って何をどう作り、どう体によいのかという会話が生まれるなど、利用者の方々にも変化が見られるようになった。

計画に記載されている農業体験については、体験だけで終わるのではなく、その後、作物がどうなるかという話までできればよいと思う。

- ・出前講座を行っており、要望があれば、医師、リハビリの職員、薬剤師、栄養士などが、どこにでも出向いて講座を行っている。

高齢者の低栄養については現在大きな問題となっている。食育というと、子どもが対象のような印象を持ちがちだが、高い世代への教育が必要だと感じている。

低栄養やバランスの乱れは深刻になっているため、食に興味のある方だけでなく、食に

興味のない方たちへの関わりをどうしていくかが課題。

市内に栄養士が沢山いるが、活躍の場が少ない。栄養士が活躍出来る場を広げられるとよい。

また、もう少し調理を気軽にできるような場所があれば料理教室の回数を増すことができると思う。

- ・それぞれの分野で、様々な人が豊かな知識をもっているが、どういう手段で、世代を超えて若い人達に伝えていくかが課題。

情報伝達の手段が大きく変化しており、特定の世代の考え方で進めようとしても上手くいかない。このような会に若い世代に参加してもらい、意見を聞くべき。世代を超えた集まりの中で、どんな手段で食育を推進するかの話ができれば。

3. その他の意見等

- ・サポーターの活動以外にも、各々が様々な活動をしている。各サポーターの活動についてまとめた資料などにより情報共有が図られれば、更なる連携の可能性も広がるのでは。

- ・小中学生の酪農体験の受け入れをする中で、体験の効果がよく表れる世代があると感じている。

心身ともに成長が著しい中学2年生くらいが、受け入れ前後での表情の変化が大きいと感じる。

はじめは嫌悪感を示している子どもたちも、哺乳やブラッシング、搾乳をするうちに目の色が変わってくる。

また、サポーターの独自の活動や市の活動を多くの人達からみえる形にしてほしい。

市内でも様々な野菜を生産するようになってきたので、給食で地場産の食材を使用する際に、どの時期に何が採れるのかを想定しながら、献立を考えていただければよいと思う。

4. 今後のサポーターの活動について

- ・第3次計画では、食育推進サポーターに更に活躍頂き、食育の推進を図りたい。
- ・サポーター数を増やすことにより、活動実績を増やしていきたい。サポーター以外でも連携したい団体等があれば、お知らせいただきたい。
- ・サポーター同士の連携の機会を設けていきたい、サポーター会議のようなものを、定期的実施したい。

5. その他（計画策定までのスケジュール）

11月21日（月）～12月20日（火）までパブリックコメントを実施。

議会への報告、第4回庁内策定委員会の後、成案。

各所へ完成した計画を送付。

事務局より

皆さんのサポーター以外の活動等については、次年度以降、情報共有させて頂きたい。

朝食を欠食する子どもの増加が大きな課題となっているため、日々の食育活動の中でも、朝食は大切だという事を引き続き伝えていただきたい。

また、本日以降、計画に関してご意見があれば連絡いただきたい。